

## 蘇 芬 瞥 見

合 田 涉

По синим волнам океана,	大洋に碧波あり
Лишь Звёзды блеснут в небесах,	纔かに星辰の光彩を視る
Корабль одинокий несётся,	孤船 舷際を滑かにして
Несётся на всех парусах.	迅きこと 風に似たり
<Лермонтов) -воздушный корабль>	レールモントフ "天翔ける船、

ナホトカ港口に沖掛りしてソ連官憲の着船を待つプリアムリエ号の船室。四時間に餘る激しいローリングの後の静寂は俄かに信じ難く、波浪の飛沫に濡れる船室の硝子窓に三羽の鷗が高く低く漂ふ。艙でノックがあって入って来たのは制服の入国検査官。提示したパスポートの写真と実物を見較べて大きく首肯し ХОРОШО! と叫ぶ。心なしか俳優ジャン・マレーに似てゐる。續いて税関吏の到来。所携する円の申告。共に検査といふよりは儀礼に近い。出て行く際の踵を揃へた挙手の礼は頗る型に嵌ってゐて美しいフィニッシュである。まさか特一等船室だからとは思いたくない。時差とて時計を一時間進める。午後三時接岸。前日敦賀出港の際に理解されたことだが、福井県一円の少年団との交歓計画があり、ナホトカの埠頭には横長の大きな赤幕に日露両国語で" 歓迎" の言葉が掲られ Пионер (少年団) の少年少女がいずれも制服で二百名ばかり横隊を組んで何やら露西亜的なメロディを合唱してゐる。この歓迎の公式行事に無関係な我々一行九名は早々に下船して我々のスケジュールへと移行する。

地名ナホトカの *На* に拘泥してゐたので、Находка が独立した単語の" 思はぬめっけもの、" であることはガイドさんの説明で初めて承知する。深く湾入した風波の立たない地形と不凍のそれである良港の意味である。港を見下す数ある丘の上の一つ、眼路の限りの緑の中に日本人墓地が哀しくそして静かに展開してゐる。全員黙悼。一行中の若い人を除外して誰が此處に葬られなかった保証を持ってゐただらう。光陰矢の如し三十餘年の歳月は永いやうで短い。更に三十餘年の経過を俟って生き残れる者は一人として居ませんよ。貴方がたは少々早かっただけですよと心中独り言ちて鎮魂の献辞とする。微笑を浮べ瞳を輝かせて五六人の幼童が傍に寄って来た。バスにとって返して一包づゝのチューインガムを贈呈する。口々にスパシーボと言ふ。

午後八時夜行寝台特急でハバーロフスクに向ふ。車窓からの寫真撮影は禁止とて心に残る数々の被写体を逸する。豫て聞き及んでゐた日本軍捕虜を使役しての土木工事や建築は夥しい数に上

る筈であるが、「痕は得分じ」でそれに固執する程の関心も亦ない。寧ろ亭々とした白樺林と沼澤地にキラリと輝く木洩れ陽のたゞずまいに魅かれたからであり、後に知るところによればそのやうな風景は大陸の其處彼處に幾らでも轉つてゐる平々凡々の風景だと言へた。

ミーフキー・ワゴン（軟床車—ソ連鉄道一等車）の睡りは眼覚めが頗る快適である。列車は同じやうな自然の中をひた走っているが隣のコンパートメントで同行のD女史がお茶を欲しがり一同唱和するも代金はドルでなければ駄目だと初老のソ連人列車ボーイが言ふ。理由は解しかねるが、想像するにモンゴルでは外国人旅行者の有効貨幣はすべてドル払だといふから、それが尾をひいてドルの受取りに何がしかのメリットが存するのであらう。仕方がないので気紛れに持って来てゐた25セント貨二枚を支払ふ。円貨換算110円ばかりで八人もの人にこれほど感謝されようとは……聊かくすぐったい。午前十一時ハバーロフスク駅着到。直ちにイントウリストのホテルに入る。整然として塵一つない市街の景観に感心する。花と人、それぞれに色とりどりで美しい。ホテルのロビーは日本人とその荷物で溢れるばかり、フロントの要員と両替所の係員を除けば、団体客専門の国内ホテルにゐる錯覚さへ本当のことに思はれて来る。

此處からモスクワ経由で東欧に向ふ者の一団、イルクーツク経由でモンゴルへ向ふ人達、アルマータ、タンケント、クリミア組、そして我々ヘルシンキ組。晝食は同所一階の奥まった小レストランで。入口近くにデンと据えられた菊正宗孤かぶりの四斗樽には吃驚。こんな處で「お菊さん」に邂逅はうとは……日本酒を廃絶して十五年になるので、別れた女房とぼったりの心境はこんなものかと思はず苦笑する。「何を考へていらっしゃるの？」とは同行隣席のD夫人。「あれですよ」と顎をしゃくる。あまり品の良い仕種ではないが彼女は納得する。よもや心中聊か去来した内容まで知る由もない。屋上のビアホールからはアムール河の展望が眼下に在った。添乗員のO嬢は東外大露語卒、萬端に気を配り、すべてにツツのない才媛。東洋系露人のガイド嬢と手早く打ち合はせを済ましバスを駆って市街観光へと、繰出す。博物館—東シベリア、沿海州開拓の歴史と記念品、特産物等々。就中1945年夏の攻略の際の戦利品であらう日本軍兵士が持ってゐた背囊、武運長久を祈る寄せ書のある日章旗、錆びついた軍刀の展示には複雑な感懐を禁じ得ない。中にも綬の失せた勲三等旭日章が一際人目を引いたと見るのは私だけの感傷であらうか。この度の全行程を通じて感じたことであるがソ連人は殊の外勲章が好きと見える。我々旧日本人（大日本帝國臣民）の眼からすれば勲章の佩用は國家的な行事や式典の際に限られこれを廉ある場合とし、平素は略章のそれに止まってゐたやうに記憶するが、ソ連では帯勲者の勲章佩用は日常茶飯のことになってゐる。但し別にそれがどうのこうのと言つてゐる訳ではないが、故ある哉、少年のバッヂ好きは異様な感じがする。博物館を出て、アムール河畔公園で一憩してゐたら背丈は大人程もある胸に数多のバッヂを飾った少年が近づいて来て「バッヂはないか、日本の莫はないか」とねだる。ホープの一本を取り出して手渡すと「箱ごとお呉れ」と迫る。少し距離のあつたガイド嬢が、ワンピースの裾を翻して駆け寄ると敵しい調子で「Поэоп！」（恥知らず）と絶叫した。我々に接してゐる時の柔和なにこやかな面持ちは一変して双眸は巨大な瞋恚に燃え上つて少

年を射すくめてゐる。鮮烈の思ひにうたれる。彼女はハバロフスク大学の学生だと言ふから少年は彼女にとって弟ほどの年齢であらう。個人的にも社会教育の徹底してゐる一例と受止めた。微風が首筋を撫で、アムールは緩かに流れてゐる。下流のコソモリスクに向けて中級の木材運搬船が進む。それを左舷をかすめるやうに高速で追ひ抜く真白い観光船が一條の長い航跡を盛り上げては下流に向けて引いてゐる。ガイド嬢の指さす中島は、中州と呼ぶにはあまりに広大でその北西の際は雲の涯に連つてゐる。ガイド嬢にその大約の面積を尋ねても正確な答を得ることを得なかつた。日本の小さな縣一つぐらいの面積はあるのかも知れない。何とも気の遠くなるやうな話である。

黄昏どき、ハバロフスク空港を離陸してモスクワに向ふ。撮影禁止、飲酒不可。塔乗前のO嬢からの事前指示である。豫め90分の空港における待機中に、アルメニア産コニャック500cc一本を吸収して置く。飛行時間5時間、更にモスクワ時間との時差7時間に対する熟睡の為の措置である。

ベリョースカで販賣してゐるコニャックの価格は日本円にして五ツ星で約3000円、味はまさに噂どほりナポレオン級だから、単に熟睡の為の措置だとはひどい法螺になる。ハバロフスク、モスクワ間はシベリア鉄道で所要時間一週間、往時は車馬で一ケ年を要したと聞き、敢て塔乗するアエロフロートに限らず現代"三次元の距離"を実感する。機内食は林檎ジュースのサービスを含めて先づまづと見た。機体にはわざわざ遠距離就航機の表示があるのに客席への配膳実務の擔當はティーンエージャーと覚しき少女一名のみ。三名のステュワーデスは、全回、"我不關焉"なので、これも斯の邦の分業明確化であらうかと忖度するが何か割り切れない。乗務員の後背を確認して大阪の中年婦人団体の酒宴が左側後席で始まる。傍若無人の高声で周知の件んのイントネーションには、ほとんど辟易する。名人芸とは程遠い下手な大阪落語。耳栓もその甲斐がない。窓外にシベリアのタイガー（密林）と見たものは、西日に夫々のその一隅を照らし出される雲の絨緞。不眠。午後十時モスクワ、ブヌコーボ空港着。周知のとほり、斯の邦では到着までホテルが判然としないシステムなるも今宵の宿は、モスクワでも超一流ホテルの"ラシーア"とO嬢の発表があり、一同"ура!!"と飲ぶ。首府でのガイドはオリーガ嬢。近世日本史を専攻する莫斯科大學の学生である。彼女とは滞蘇中の些細な論争を含めて、今回の行旅ではこの動作の緩漫な老人の癩癥と我儘に耐へて、より露西亜的な表象の認識と理解に資して呉れたことはまこと感謝の極みである。私事に亘るが、現在高三在学中の末娘が三年後に果してオリーガ嬢が外爺に与へた深い印象と感謝とを現実のものとして得るや否やは甚だ困難に思へる。九冊のパスポートは一括してフロント預り。引換の宿泊証を、宿泊階毎に勤務する *Tëtka*（おばさん）に提示して鍵と交換する手續を完了。ラシーアホテルは超一流の名に恥ぢず、ベッド総数不正確な記憶では4200、西館、北館、東館が殆ど各階とも迷路状の通路で脈絡して各館各階毎の出入口に制服の衛兵？が常駐してゐる。外人の宿泊者に不必要な威厳の誇示は無用との配慮からか、厳めしい制服制帽のそれに比して勤務に就いてゐる青年達の表情は和やかである。手廻品を割当てられた914号

室にてベッドの傍に身を投げ出すや否や俄かに急激な酔ひと抗がひ難い睡気を発する。

“都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関、目覚めると同室、奈良出身のT氏が体操服に着更へてゐる。夜どほし窓を明けてゐた故か、目覚め間際の意識の濁濁が不図も白河の関に連るとは……。これを昨夜のシベリア5時間の通過に於ける感慨に直結させるにしては少々話が出来すぎてゐる。午前五時の目覚めにT氏が語るには、彼の外国旅行はこれまでも屢次に亘る由、いつも早朝のジョギングを例とするといふ。氏の疎明に依ると現在68才。退職工業高校教員とのこと。短かく刈りこんだ漆黒の頭髪からは、とてもお年には見えない。南米、中国、南東亜細亜、北阿、中東を近年になって連続的に経廻ったとの経験談。蒐集を趣味として、各国のコイン、民俗土産品、旅行先で入手する絵葉書、宣傳紹介等の公刊文書、就中、氏が最も執着するのはパスポートに日付を以て明示する各国の出入国記録である由、ソ連ではパスポートそのものに記録はしないで、がっかりだと言ふ。よせばいいものを、勃然と稚氣を生じ、愁ひに記録を追ふよりも現在遠くこの莫斯科にゐるのだといふ実感こそがこよなく尊いものだとする立場を開陳する。形相と質料と。朝靄の中を走り抜かうとするT氏を、両側の扉の裡がまだ寝静まってゐる薄明の廊下に送り出す。

ホテル・ラシーアから入れた電話に依れば、至近距離に在るモスクワ大学は既に夏季休暇に入り、社会科学関係学部の教授連中は、殆どが南佛または黒海沿岸の国立保養施設に移動してゐるといふ。移動（Движение）とは日本語の語感とは程遠く、そっくりその儘、同じ程度の設備のある研究施設と環境に身を遷して、充分な陽光の下で引續き同じ研究テーマの討究に専念することを言ふらしい。手持の費用で足が出ないか、その間の家族の生活費は大丈夫か等々所謂平均的日本人の雑念は全く無用の杞憂に過ぎない。つまり、このことは小生を含めたやうな“教授もどき”は逆に斯の邦には一人も居ないが故に可能なのだと心に落ちた。リフトで一階に降り、モスクワの絵葉書と日本向切手を購入。家族、親戚、知己に送信。毎日三度の食事に同席し、観光に同行するだけの仕儀に過ぎないとして、此の頃漸く添乗員のO嬢は別としても8名の同行者全員の氏名と、その人物の実像が一致し出す。U夫妻。Y女史。D夫妻。T氏。M姉妹。T氏の六十八才は別格とするも、平均年齢55～56才。相当の老軍団であるが、平均年齢がこの程度で納つてゐるのは三十代のY女史のそれが與つて力が大きい。添乗員のO嬢を別格としても一行中の若やいだ気分はやはりO嬢の若さに負ふ所が大きい。ガイドのオリガ嬢の愛称は露語で“オーリャさん”であり、その紛似を承知で爾今O嬢を呼ぶに“ヨーリャさん”とする。

気温18.5°、モスクワの空は晴れ上つて青い。その青さが決して濃いとは言へぬ淡青の儘に、希臘正教の寺院の玉葱型をした寺院の頂部が、一堂の伽藍に大小高低さまざまの光耀を踵めて、蔽そかに朝暎と對峙してゐる。緯度が高いので影を見せる日射はかなり強い。通称“赤の広場”露語では赤と美の語源は同じであるが、見る限りの色彩感覚では、この広場は現実的に色彩上では寧ろ緑の広場であつた。平地に見る白楊と白樺とそして花壇に於ける花々の調和。特にこの調和

は豫め美学的に計算された絵画的な手法を度外視しては絶対に説明がつかない。京都の枯山水の幽玄を言ふならば、これは計算され盡した美学上の、より広大な空間を踏まへた完全な調和の達成とでも申すべきか。美の認識に国籍のないことは周知の事実として、帝政ロマノフ朝時代の“俱に天を戴かざる…、筈の多くの歴史的建築物が、国家的豫算を計上されてこれ程に手厚く保存されてゐることに感銘を受ける。Оля嬢の説明に依れば、ロマノフ朝、歴代の戴冠式を挙行したウスペンキー寺院は、現に櫓を組み上げて修理中であつた。総員八名の専用バスの中からソ同盟政治局関係の赤旗を掲げた宏壮な建築物に接し、“長門の壇の浦で滅亡せしとの平氏復活せり”と私語したところ、“甚だ不謹慎なり”とD氏より穏やかな注意あり。誰しもが源氏の末裔であるやうに信じたがる現代では、言ふなれば理想郷としての桃源郷実現を夢見てその先達たらんとした平氏の公達がゐたとしても強ち牽強付會の発想とばかりは言ひきれまい。

露佛戦争での鹵獲品、佛軍の火砲の展示を見る。概数200門ばかりと見受けるも、これは飽くまで概数なので数は期し難い。各口径250耗内外、歴史の風雪に耐えて妙に生々しい趣きを全く潜めてはゐるが、レフ・トルストイのボロジノの会戦に於ける迫真の描写を知る者には総司令官クトーゾフの眉間に刻まれたであらう深い皺がそれらの砲車にオーバーラップする。レーニン廟では国こそ違へ支分国(CCP)からのお上りさんが行儀よく何列かに並んで順番を待ってゐるのを見る。広場を横切ると著名な“王様の鐘”の前に出るが、嘗てこれまで唯一度も撞かれた例しはなかつたと言ふ、200噸の愕くべき総トン数。その実体は、せめて寫真にでも頼るのでなければ、説明のしようはない大鐘。正餐を前にしてオーリャ嬢に拙篇、“Очерк Правоведения”を一冊進呈する。ブレジネフ憲法に関するエッセンスなり、代りに欲しいと思ふものの、専攻が違へばこれは無理な注文であらう。

休暇明けを俟って、日本より直接、人を介して教授に依頼する他ない。食後ホテルのバーでビールの満を引く。日本でも賣つてゐるクワスに似た味であるが、もうひとつ何か、馴染めない。ディエウオシカ(娘さん、ウェイトレス)がウォトカをどうかと勧めるのだが音にきく強烈な度数とて初めから敬遠を心がけ、婉曲にお断りする。漸く連日の疲労の蓄積して来るのを感じず。手持ちのルーブルも底をつき出した。明朝は先づ両替が必要とならう。翌日午後遅く、シェレメチェボ空港に向ふ。途中、オーリャ嬢にソ連の一般乗用車に就て質問をすると全国各地に行き渡る同型車はヴォルガと言ひ、凡そ5000ルーブル。まだまだ供給が需要に追いつかぬとか、購入の申込をして実際に入手できるのは大分先の話らしい。ソ連国内での生産の他、プラントを輸出して、ルーマニアでも生産してゐるといふ。排気量は日本車の1300CC級に見受けられる。但し時折見掛ける黒塗りの2800CC級の大型車は例外なく、政府高官とか党幹部の乗用であり、駐ソ外国公館の公用車を除外すればこのことは先づ間違ひない。レニングラード行アエロフロートの搭乗前検査は国内線とて、あつけない程簡単に済む。ゲートで見送りのオーリャ嬢と一同暫しの別れを惜しむ。急上昇する機の窓に拡がる相変らず広大な森と農地と湖沼、距離は東京札幌間程もあらうか。機内で隣席に近い母子連に持参したチューインガムを進呈、子供は噛んでその儘嚙下してしまふの

で、万一を慮り、「ヨーリア、嬢に母親宛念押し方依頼する。

何を思ったのか2才ばかりのその女の子が廻らぬ舌で「ありがと」と言ふ。すごく愛くるしい駄目押しを重ねてみるが、母親は笑ってとりあはない。消化はせずとも大丈夫排泄すると思ふからか。レニングラード空港ではタラップの下にこれまでの例であった空港ゲートへと客を運搬するバスの姿がない。間もなく判ったのは、すぐ目の前に平行移動をするエスカレーター？の存在すること。空港ターミナル迄かなりの距離である、正に動く舗道。ロビーにて待つこと約三時間、ホテルの手配がつかないからか。例によって持前のいらいらが始る。お止めなさい。此所は大陸なんですよ。斯の邦で当夜の止宿先が決るのは到着後である事実は先刻承知済みではありませぬか。ヨーリア嬢とレニングラードでのガイドさんとの頻繁な打ち合はせ。帝政時代からの伝統あるアストリアホテルに決定。何らの予備知識もない癖に一同換声を挙げる。気温19℃。小雨そば降る舊都、彼得堡の街並を我々の専用バスはアストリアに向け疾走する。夕刻なのでレニングラード大学女子学生たるガイド嬢（氏名失念）の説明はないが、当然に彼女の専攻も日本語であらうから明朝以降の活躍を御期待申し上げたい。

アストリアはまこと古典的な客舎であった。七階の301号室。各階に日本のホテルのフロントに相当する鍵番のおばさんが交替制で常駐する点はモスクワと同様だが、各階毎に何気なく置かれて、しかも日常の用に供されてある王朝風のソファーセットと美術品の飾り付け、その一つ一つが決して模造品や垂流のそれでないことは心なき身にも充分察知致される。明日に控へたエルミタージュ美術館の見学に充分の期待を加へられる所以。殊に、美術に造詣のあるY女史の欣びは一入であらう。モスクワでも、彼女は「群」を離れてひとり美術館に足を運んでゐた。（華麗）な夕食の後、部屋に戻って下調べをする。時代を超へて耽美の思ひのある限り、美術品の解説に接して、実物をまのあたりに、することはそれなりに有益であるが、貴重な文献の实在を目前にして遠路はるばる千載一遇の機に恵まれながら、時間がない儘にこれら瞥見で終わってしまふのは如何にも口惜しい。日本から携行した文献検索の資料としては板寺一太郎氏著（法学文献の調べ方）（東京大学出版会）があるが、この故にこそ一念発起して、疲労のあまりの臥床を理由にして爾後三日間、午前乃至午後の自由時間を隔日に自分の為に確保する。同室のT氏が眼の冴へた夜のしじまに高鼾、絶へ間ない吸気呼気のそれは類ひ稀なるものゝ如く、絶品と申す他ない。王様の鼾もかくやと腕時計が午前四時を廻るに及んで就眠の要を感じて漸く焦燥する。隣室に續く浴室にベッドより敷物と上被と枕と体を遷す。日本流に申せば浴室の面積は九畳程度、同様容積の浴槽を残して縦長に白色のタイルが壁と床とを覆ってゐる。トイレは別室に在り、寢室からは此のバスルームをいなすま形に通らねばならない。事実として此の壮烈なT氏の管楽を、毎夜室を借にして来ながら私は知らずにゐた。併し、高鼾は安心による善意の極致であることが一方で哀しい。エルミタージュの見学を断念したので、目覚めると既に日は高く、獨りレニングラード大学を行先としてタクシーを雇ふ。タクシーは例の大衆車ヴォルガとて白と黒の市松模様が屋根の上に、そして全部の扉の外側に掲げられ、これを全ソ共通の表示としてゐる。ガイドブックには西欧なみの

距離に依る凡その料金と、斯の邦では珍らしいとされる、チップ類の表示もあり、廉いのでさほど苦にならない。その偉容で偏ねく全世界に有名な、モスクワ大学と較比すれば、斯くともレニングラード大学のそれは各ファクリティエート（学部）毎に独立した趣を持つ建築物の総合に見受けられる。独軍の破壊の後に、可能な限り忠実に復原されたと聞く此の街並一般に徴しても首肯できる所である。総ゆる角度から、総ゆる場所が次々に恰好の被写体となる。強いて理屈を付けければ日本とて例外ではなからうけれど、局所的に限定される真善美ばかりを表面上にふりかざす感のする日本の写真コンクールのあれは一体なんであらう。メインストリートを外れた横町の並木に隠れて法学部の入口がある。バカンス酣とて法の一般論主任教授は黒海沿岸の保養地ソチに在り、憲法学教授はモスクワを経て目下東独ドレスデンに在りとか。

高名な此の大学の教授達と面晤の機を失した時機外れの来訪を詫びると共に、外国流にアクティブに我が身の不幸を陳述して再訪を言伝てる。

“Гостиница астория”（アストリア・ホテル）は、印象に残るホテルである。此處を起点に初めて斯の邦邊境の舞踊団公演をも見る機会を得た。邊境とは、ここでは単にモスクワやレニングラードからの距離と解釈されたい。総勢約200名。日本流に申せば一座と言った感じがびたり。舞台の男性は僅か5名ほど。残りは黒髪鼻梁あくまで秀で皮膚透るばかりの美女群。プロポーションは申すに及ばず、その歌唱力は絶妙であった。レニングラード発。国際列車。市域を外れると、古い記憶ではすぐに芬蘭領に入る筈であったが、ヴィボルクを経て第2次大戦後の新国境 *VAINIKALLA* 着。暫く見馴れたロシア文字から俄かに普通のアルファベットに代る。駅名をこじつけで一行に葡萄酒の色と覚えたら如何と提示。一面の白樺の群落と、湿地と小沼と水草。行けども行けども何等の変哲ない無限の風景の拡がりの中で、車窓に変わるものと言へば、唯水鳥の寝覚めであらう。国際列車なので、フィンランド側、*VAINKALLA* 駅到着に一旦停車、ソ連官憲が乗り組んで来て検査が始る。ヨーリア嬢の予備知識として“甚だ嚴重です”と言ふ。携行せるラッケー二個。1、ショルダーバッグ、2 手提トランク。例に依り旧世紀風の厳めしい片章を付けた出国検査官。いきなり日本語で“ハラマキ、見せろ”と叫ぶ。“ハラマキはない”と襯衣をたくし上げる。それには及ばぬと片手で制して、直ちに荷物の中味を一々詳細に検査する。モスクワ、レニングラードのベリョースカ（前出、外国人旅行者のための賣店）で購入した全商品の勘定書と現物との確認あり、最後に日本より持参せる手廻品の一つ一つに及ぶ。越中禪を手にして“何か”と訊ねる。ハラマキは知ってゐてもこれは知らないらしい。白旗にもなるが、通常の使用法は下着であると説明する。

妻が出発に際して作って呉れた手縫の新品であるからまだ救はれた。ハラマキを日本語で知ってゐるのは察するに嘗て日本人中のワルが何らかの禁制品をその中に秘匿したに因る（露見）が先行してゐるのであらう。芬蘭側に入って最初の駅 *VAINNIKALLA* を撮影する。総練瓦造りの洒落た駅舎を背にして、手入れの行き届いた花壇に七色八色の花々が擾れ咲く。更に駅舎の背景は鬱蒼と言つても何ら誇張にならない白樺林である。夕食時食堂車での一行程の表情は明白に和み

を加へてゐる。それは他でもない、厳しい検査に通つた安堵とフィンランドの未知に対する明日よりの期待とがあるからだ。食堂車の珈琲だけは相変わらず不味い。かなりのスピードであるが、長尺レールの故か列車の振動は少ないので器から飲物の零れる経験はついぞなかった。

翌早朝ヘルシンキ着。断るまでもないヘルシンキ駅着である。といふのには理由があつて、モスクワではその市内に在つてレニングラード行の列車の出発する駅をレニングラード駅と呼称し、反対にレニングラードからモスクワ行の出るそれをモスクワ駅と呼ぶ愕くべき見聞があつたからである。今朝の駅頭に出迎へたガイドさんは意外にも正真正銘の日本女性であつた。假りにW女史として置かう。二十代後半のまだうら若い人だが自己紹介では、スウェーデン人の研究者と結婚して五年来ヘルシンキに在住してゐると言ふ。我々のホテルは、駅から至近の距離にあるVAAKUNA。

以下は、今回の出発と行き違ひに届いてゐたフィンランド大使館の御好意で自宅宛郵送仰いだ諸資料を帰国後に、検討して現地でのうっかり見落した点を補ひ、或ひは誤りを誤りとして正したものである。朝食後すぐにホテルを出て市内観光に出掛ける。

緯度はレニングラードと略同じ北緯60°であるが、晴れてゐる割には少々肌寒い感じ。人口471万強、一平方軒当り15.4人。英国の228人、米国の22人に較べその過疎ぶりは逆に羨しい限りである。とは申せ首都ヘルシンキの人口は約50万円、二位のタンペレ17万人、トゥルク16万4千、エスポー

12万人と続いてゐる。ヘルシンキに関して言へば、都市のただずまい、建造物、公園その他、西欧やスカンジナビア諸国のそれと顕著な差異を求めることに苦しむ。住民は一般に色白で金髪、青又はグレイの瞳が多く、金髪の他には亜麻色の髪をした女性も多く見受けられる。人種的には殆どの欧羅巴人同様混血であり、言語の中核を形成するのは、フィン・ウゴル語族 (*Fin Ugrian Group*) を形成し、幾世紀にも亘つて近隣のインド・ヨーロッパ語族に影響されて来た。ホテルから我々の為の貸切回遊バスで2-3分の距離に青空市場と半円の屋根のある公設市場とがある。すぐ傍には白ペンキの漁船が輻湊して日曜日とあつてか、かなりの人出がある。聞けば市街地の形成は数多くの小島を橋その他により繁いだものとか、市場正面の小島を見杓かして反対側の埠頭に、ストックホルム航路の華麗な客船が見える。その右側に天を画してウスペンスキー寺院の尖塔の十字架。ゴシックのそれではなくて、1809以降、斯の邦がスウェーデンよりロシアに割譲されてからの建築なので、その名の示す通り、希臘正教の寺院の様式をその儘踏襲してゐる。名前の等しいモスクワのウスペンスキーの建物とは対照的である。翌日市内の際立つて様式を異にす



ヘルシンキ大学図書館



る三寺院への案内があり、更めて各その建物の壮重さと、例外的に撮影が禁止されてゐるウスペンスキー内部の景観とに接する機会を得た。人の世の食生活は民族を異にしてもさまで違ひのないもので、青空市場では生鮮魚介類、塩干物、亜麻織手芸品、スーパーニールとしての民俗玩具、ありと総ゆる野菜果物、毛皮の類が賣られてゐる。毛皮の露店には興味があったので覗いてみるが主として馴鹿の鞣製品、畳一枚餘のものか邦價八千から一万円とは安い。狼のそれが四万五千円許り。貂やミンク製品は見当らない。貨幣はマルカ。補助貨幣としてペニイがあり、百ペニーで一マルカ。因みに一マルカは邦貨六十円に相当する。屋根のある公設市場では採光に神経を使つてゐる。全賣場が食料品、此處で初めて馴鹿の枝肉を見、そしてその加工品の巨大な実物を見た。食指は動かないが、もしホテルのレストランでの一皿に出たら、ものは経験で一切れは試食に良からうと思ふ。午前中の下見の結果を午後は各人が夫々出向くことにして道順を地図に依り確かめる。貴金属や骨董といった値嵩の張る土産品は別として大抵の品物なりその殆どは此の市場だけで間に合ふであらう。いつも団体行動ばかりが決してその能ではない。観光だけのガイドなれば、一行との連帯からW女史に個人的質問を發してその為多くの時間を割かせることは極力遠慮すべきは当然であるが、頃合時間帯を見計つて斯の邦の高等教育の実状を訊ねてみる。総合大学は今国で19あり、単科大学としては他にヘルシンキ工科大学、もある。創立の最も古いのがトゥルク大学でその創立は1640年、日本ではまだ江戸時代の初期に当る。日本でいふ一流大学はヘルシンキ、トゥルク、タンペレ、ユヴァスキュラ、とオウルの諸大学。春秋二学期の学期制に加へて今世紀初めから夏季にも大学が開講され、定期の夏季大学はヨエンスーとユヴァスキュラの二大学で開かれてゐる。夏季大学への入試はないといふからこれは日本での夏季開放講座のやうなものだらうか。現在検討中の計画が実現すると、将来は職業学校からも単科大学に入学できるやうになるといふ。ところでその職業学校とは、元来、中等教育における上級中等教育に比肩する一分類であり永い歴史と伝統とを持ってゐる。例へば1840年創立のムスティアラ農業学校。職業教育は専門化への第一ステップであり総合義務教育の進路指導に基づいて行われる。一方の上級中等教育では三年間普通教育を受け、生徒は最初の一年の普通教育の後、それを繼續することも職業訓練学校に変わることも可能や選択制になつてゐると聞いた。又大学における教授達の研究や各種研究機関のそれは、殆ど個人毎や研究機関を中心に展開してゐる。1969年施行の法律により、科学行政の中央機関は科学評議会中央会議と六箇の評議会から成るフィンランド、アカデミーであり、そこには終身又は期限付きの教授職が設けられた。国家科学行政評議会もこのアカデミーに所属する一分科である。(FACTS ABOUT FINLAND—Kustannusosakeyhtiö Otava, 1979 Tokyo)

W女史は徹底した斯の邦の社会福祉に就て、多くを語りた様子に見えた。紙数もあるのでこれを要約すると、女性として当然な出産と育児に対する保障である。特に夫妻とも研究者としてヘルシンキ大学に在職してゐると、これを莫然と、制度があるによつての *Reflex wirkung* (反射作用) と見做すに慊らず、ついにその本質的問題の所在に関して日本との現状比較になつてし

まふのである。フィンランド近年の医療制度上の改革の要点は、公共保健法と、市町村総合病院法の改正で、後者の主眼は病気に対する根本的予防措置と非入院患者の処置にあるといふ。斯ゝる措置を本来任務とするは各自治体の運営する保健センターなのだが、施設数としてこれのみで全国で250箇所程既設のものがある。近い将来に此の保健センターは全額無料となるが現在では平均実費の8%は個人負担になってゐる。W女史の例として正常分娩で産前産後四週間の全入院期間を通じて支払った総額は邦貨にして一万六千円に過ぎなかったと語った。同行の女性達の感に耐へた表情が印象的である。当日午後ヘルシンキ大学東洋文化研と附属図書館訪問。研究資料交換の来意を告げる。フィンランド語はおろか、スウェーデン語、そして慚愧の極みであるが英会話も自由ではないもどかしさ。止むを得ず共に受付では英語の筆談に頼るよりない。細部の意志を通ずるには普通会話の倍以上の時間を必要とする。著名な歴史学者、神学者の J.M 先生に面会を求めても、本日は先生はお見えにならないし、確かな紹介状がなければ先づ無理でせうと言はれる。不躰も甚だしい申し出だから致し方ない。これに懲りて図書館では日本から来た旅行者の見学はあっさり承認されて「如何なるジャンルの蔵書を希望するや？」と宣ふ。奉答の結果、示されるは著者名と件名目録の大冊。几帳面でそれであながら如何にも善良さうな日本流に言へば大男。閉架式ではあるが、少しも閉鎖的な感じのしない年古りた雰囲気には圧倒される。面白いのは夏季休暇中とてか閲覧者の影は殆ど見えず、司書職も交替で休暇を採るとか？閑散としてゐる我が大学図書館との相似である。大男氏は訪ふ日本人は珍しいと見えて日本の図書館の運営に興味を示す。これも筆談、あれも筆談、大男氏の英会話力は相当のものを見た。啞ではない証拠にこちらも挨拶程度のことは喋らぬと間合いがもてない。今度の旅行で印象に残る数少ない一人として深く別れを惜しんだ。プレゼントの持合せがないので、心暖まる彼の親切に対し翌日W女史を介して拙篇一冊を進呈する。ヘルシンキは折返し地点になるので、全行程数千軒米、翌日の日程を消化すると直ちに型ばかりの土産品ショッピングに掛る。嵩張る品ら直接日本宛の航空便で送るのが常識であらうが、中でも最も量ばる馴鹿の毛皮と、これも銅製の買はずにはいられなかった角燈とは帰路敦賀の港に着船してからも随分その携行に荷厄介を覚えた。ヘルシンキで記憶に残るものとしては現代フィンランド建築を代表する、フィンランド銅岩、ガラス、そして特産の木材と花崗岩を素材としたタイヴァルラハティ教会。女流エイラ・ヒルトゥネン作の重さ24吨、高さ10米に及ぶシベリウス、モニュメント。1971に完成し1975年に各国主腦の集ふ国際会議場に充てられた総白大理石を素材とするフィンランド・ホール等。これも帰途モスクワでオーリャ嬢が特別に我々一行の為に設定して呉れた、モスクワの世界に冠たる地方鉄乗車の機会に、感歎した駅のコンコースに聳つウラル産赤大理石の円柱と共に、その壮麗さは今猶眼底に焼きついて離れない。世界は狭くなりました。今よりも以前に、これほど同時代人として生きてゐることの、所謂、一期一會の思ひを鮮明にできた時代が嘗てあつただらうか。行路と全く同じプリアムーリエ号の船室113号で更めてつくづくと世界地図を眺め渡したことである。

## 追 記

本文中でも触れた通り、近年文化面での日蘇交流は、両国人旅行者が往復する数の上だけからしても甚だ驚異の数に上っている。果して単なる旅行者数の激増だけが交流の質的向上に直結する理由とはならないまでも、一例としてのハバーロフスクのホテルロビーで見る日本人旅行者の実態は、その数の上だけで正に瞠目に値するやうな混雑ぶりである。其處では或る期間を限っても各人各様、多様な見聞と接触と感慨とそして追想が可能な筈であり、今更私如きが、したり顔の“瞥見”をものする必要もないのであるが、瞥見とは人夫々に元来甚だ主観的な実在であるとの見地から、此のモノローグに対する大方の御宥恕を乞ふ次第である。

“羅馬は一朝にしてならず”表現の適切性は暫らく措くとして、無謀にも此處での“羅馬”を私は汎人類的な熱い思ひに托するのであるが、個と全との窮極的相関はやはり免れ難い人類永遠の課題であらうと思ひつめる。擱筆に方り駐日ソ連大使館、並びにフィンランド大使館から恵与を賜った、小生の活用能力を遙かに超へた膨大な諸資料を前に、深甚の感謝を捧げる。御啓蒙多謝。

1979. 8. 15 岐阜鵜沼に於て。